

研究主題

「表現活動を通して自他を尊重し合う児童の育成

～リフレクションと鑑賞を軸に～」

八王子市立第三小学校

教諭 真野祥子

第1 主題設定の理由

図画工作科の表現活動を、リフレクション（振り返り）と鑑賞、それらも含めたカリキュラムデザインの3方向から分析するとともに、生きる力の育成をめざすうえで欠かせない「主体的・対話的で深い学び」の視点を取り入れた授業改善・授業実践を積み重ねれば、自他を尊重し合う児童の育成につなげることができると考え本主題を設定した。

現行の小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説（以下解説とする）第一章1（1）改訂の経緯では、未来を創り出す子どもたちに必要な資質として、「様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと」¹が求められている、と示されている。他者と協働するために必要となるのは、自他を尊重し合う態度であり、教育活動全体で実現を図るべき課題である。

本研究では、図画工作科の表現活動を、リフレクション（振り返り）、鑑賞、カリキュラムデザインの3つの視点から分析することで、「主体的・対話的・深い学び」の実現に向けた授業改善がなされ、自他を尊重する児童の育成につながる授業改善の鍵が明らかになると考え、研究主題とした。

解説では、「生きる力」は、ア「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）、イ「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力」の育成）、ウ「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）」の三つの柱に整理されている。図画工作科では特にウの「学びに向かう力の涵養」が重要であると考えており、図画工作科において「生きる力」を育むために有効な学習活動は、児童主体の活動であると捉えている。

児童主体の活動を保障するためには、表現活動を下支えする安心・安全な環境をベースとした「自己肯定感」と、自分が何を思い・考え、それが周りに受け入れられるものなのかと考える。「他者受容・自己理解」の精神の両方を保ちながら、自分らしく周りに受け入れられる形で主体的に表現できる「自己実現」の力へとつながる授業改善を行うことが必要であると考え。

私の考える自己肯定感には自尊感情が含まれている。自尊感情について、桜井（2000）²は「Rosenberg(1965)の自尊感情尺度を作成するにあたり彼が『very good とてもよい』の自己有能

感（他者に対する自信・優越感）ではなく『good enough これだけでいい』の自己受容を意味するような自尊感情を対象にした」と記しているが、この自尊感情（self-esteem）こそが自己肯定感であると考えられる。そしてこの自己肯定感は、心理学者である A.H. マズローの人間の動機づけ理論によれば、最上位の自己実現の欲求に深く関与していると考えられる。マズローは人間の欲求には5つの階層があり、「生理的欲求」「安全欲求」「社会的欲求」「尊厳欲求」の下位にある4段階の欲求が満たされて初めて「自己実現の欲求」が生まれると示している。ここでいう「自己実現」とは、自分やりたいことができる状態のことではなく、「偽りのない自分の姿で好きなことをして、それが社会貢献につながる状態」である。これは、前述の「生きる力」ア・イ・ウを実現した状態であると考えた。

「生きる力」を「自己実現の力」と捉えると、ありのままの自分を受け入れる「自己肯定感」だけではなく、その行動が「周り（社会）に受け入れられるものなのか」という視点も必要である。そのためには客観的に自分の姿を捉えるメタ的認知に根差した「自己理解」や、他の立場や気持ちに寄り添う姿勢「他者受容」の精神が必要不可欠であると考えた。「自己肯定感」と「他者受容と自己理解」が両輪として作用することで、「自己実現」に到達することができるように考える。「自己肯定感」並びに「自尊感情」を大切にしながら、「他者受容・自己理解」＝他者との関係性も大切にす、即ち「自他を尊重する」ことが「自己実現」＝「生きる力」の育成につながるのではないかと考えた。

図画工作科の目標（図1）を実現するために、図画工作科の授業では、下記 A・B・C 3方向からのアプローチが大切であると考えた（図2）。(3)の学びに向かう力・人間性等の育成に対しては、A 日常的な振り返り、(2) 思考力・判断力・表現力の育成に関しては、B 日常的な鑑賞、(1) 知識・技能の習得に関しては C 授業カリキュラムの改善、を通して児童の創造性や豊かな情操を育む表現活動の根幹を担う「自他を尊重し合う児童の育成」につなげていきたい。近年よりよく生きることをウェルビーイングと表現されているが、UNICEF 報告書 2020（「レポートカード 16」・子どもたちに影響する世界：先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か）による実態調査では、日本は身体的健康の項目は1位であったものの、精神幸福度では37位と低迷していることが分かった。³ 豊かな情操を培うことが目標に掲げられている図画工作科の授業では、より一層自尊感情を高め、他者と協働し未来を創造する力に繋げていく必要があると感じている。

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的にじっくり表したりすることができるようにする。
- (2) 造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
- (3) つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

図1

そこで本研究では、図画工作科において、A・B・Cの3方向の具体的なアプローチを検証し、どのような実践を行えば児童の資質・能力を高め、児童主体の活動を保障し、自他を尊重し合いながら自己実現の力（生きる力）の育成につなげることができるのか、ということをも明らかにする。

第2 研究仮説

A 日常的な振り返り、B 日常的な鑑賞、C 授業カリキュラムの改善の3方向からのアプローチを通して、「自己肯定感」「他者受容・自己理解」から成る「自己実現」の力＝「生きる力」を育むことができる。

本研究ではA 振り返り・B 鑑賞それぞれのめざすべき児童像を設定し、その手立てとして有効な具体的なアプローチの実践・検証を通して授業カリキュラムをデザインすることで「生きる力」を育むことができるのではないかと考えた。

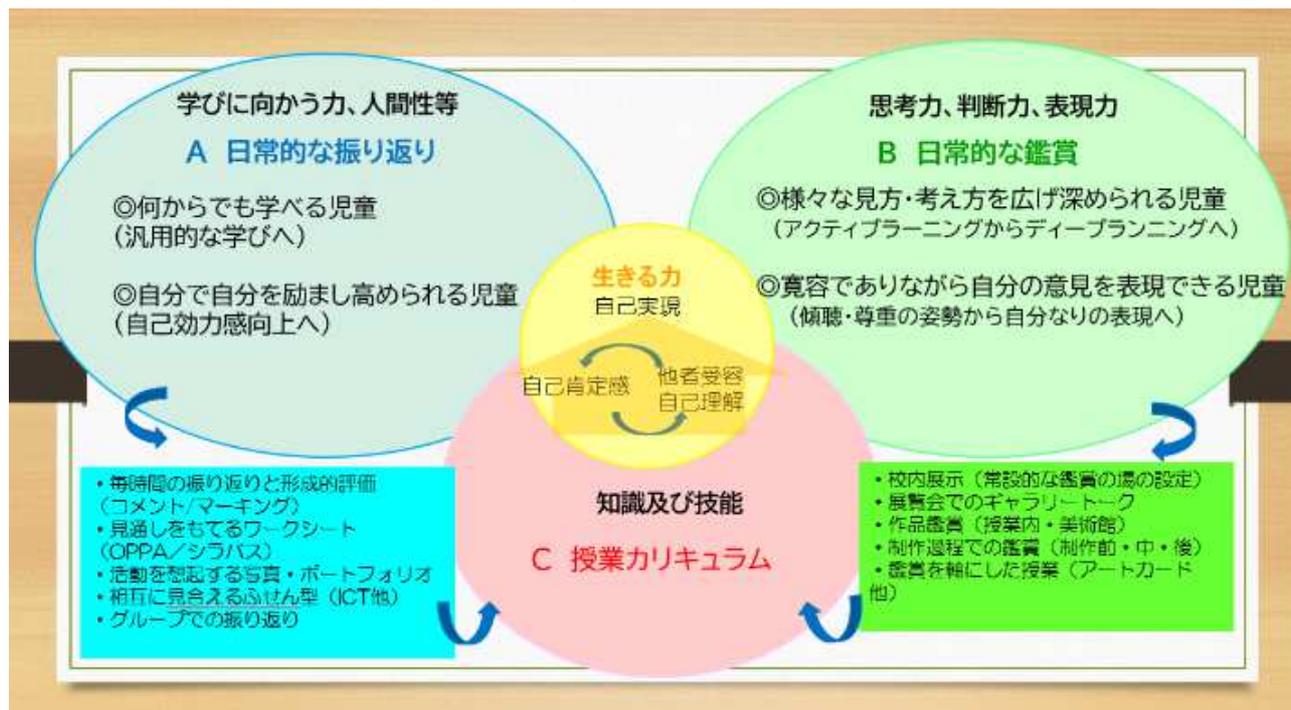


図2

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

(1) 振り返り (リフレクション) における先行研究の分析

先行研究の分析を通し、「主体的・対話的で深い学びにつなげるための振り返りの方法を検討する重要性」を再認識し、今までの自分自身の教育実践を振り返り、整理し、新たに得た振り返りに関する先行研究の知見を基に、新たな実践へとつなげる 主体的・対話的で深い学びにつながる振り返りの自分なりのカリキュラム編成の実施、の2点を重点的に行うべきと考えた。

解説一章1(2) には「『主体的・対話的・深い学び』の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)を推進することが求められる。(中略)その際、以下の6点に留意して取り組むことが重要である。ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することをめざした授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組まれ蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入

しなければならないと捉える必要はないこと。」とある。⁴ 国立教育政策研究所(2020)⁵からも、主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる『主体的な学び』が実現できているかという視点。」が示されている。また、梶浦(2020)⁶は、「『振り返り』という認知過程を経ることが、学びを深める重要な要素になっていると気が付いた。」と、振り返りの重要性を述べ、振り返りのカリキュラムについて「本格的な DAL (Deep Active Learning) 授業は一年に一度だけ実現出来れば良いくらいのペースで (中略) 数年かけて徐々に、本格的な AL が 1 / 3、主体的・対話的な授業が 1 / 3、問題演習中心の協働学習 1 / 3 に近付けていく程度が良い。(中略) 現実的にできる範囲で徐々に精度と頻度を上げていく方略を、SIDLES (サイドルズ Subjective Interactive Deep learning Efective Straregy: 主体的・対話的で深い学びの効果的で実用性のある方略) と呼び、推奨し、確実に成果を上げてきている。」とも述べている。

これらのことから、先述の通り「主体的・対話的で深い学びにつなげるための振り返りの方法を検討する重要性」を再認識し、今までの自身の教育実践を振り返り、整理し、新たに得た振り返りに関する先行研究の知見を基に、新たな実践へと繋げる 主体的・対話的・深い学びにつながる振り返りの自分なりのカリキュラム編成の実施、の 2 点を重点的に行うべきと考えた。

(2) 鑑賞教育における先行研究の分析

学習指導要領解説はもとより、「論文や著作」をはじめとする先行研究に基づき、図画工作科における鑑賞の重要性を再認識し、日常的に授業内に表現活動と一体として取り組む鑑賞や校内環境も含めたカリキュラム編成の実施、 ギャラリートークの事例を基にした造形的な視点に主眼を置いた実践検証、 の 2 点を重点的に行うこととした。

学習指導要領解説第一章(1)では、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍するころには、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。(中略) 我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。 図3

造形的な見方・考え方とは、「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」とであると考えられる。

「感性や想像力を働かせ」とは、表現及び鑑賞の活動において、児童が感性や想像力を十分に働かせることを一層重視し、それを明確にするために示している。「感性」は、様々な対象や事象を心に感じ取る働きであるとともに、知性と一体化して創造性を育む重要なものである。「想像力」は、これまで高学年の学年の目標や内容などで示してきたが、全ての学年の学習活動において、児童が思いを膨らませたり想像の世界を楽しんだりすることが重要であることから、感性とともに示している。

「対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え」とは、材料や作品、出来事などを、形や色などの視点で捉えることである。「造形的な視点」は、図画工作科ならではの視点であり、図画工作科で育成を目指す資質・能力を支えるものである。具体的には「形や色など」、「形や色などの感じ」、「形や色などの造形的な特徴」などであり、学習活動により様々な内容が考えられる。「自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすこと」とは、児童が心の中に像をつくりだしたり、全体的な感じ、情景や姿を思い浮かべたりしながら、自分と対象や事象との関わりを深め、自分にとっての意味や価値をつくりだすことである。これは、活動や作品をつくりだすことは、自分にとっての意味や価値をつくりだすことであり、同時に、自分自身をもつくりだしていることであるという、図画工作科において大切にしていることも示している。

につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。(中略)人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断できるのは人間の最も大きな強みであるということの再認識に繋がっている。このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して問題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすることが求められている。(下線部は筆者による)とある。また、第一章1(2)「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進の留意点として、図3の様に示されている。図3のその教科等ならではの、に対応する部分は図画工作科の目標では(図1参照)表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方に当たると考えられる。学習指導要領第二章第一節1で「表現及び鑑賞の活動を通して」について、児童が感じたことや想像したことなどを造形的に表す表現と、作品などからそのよさや美しさなどを感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める鑑賞の二つの活動によって行われる。表現と鑑賞はそれぞれ独立して働くものではなく、互いに働きかけたり働きかけられたりしながら、一体的に補い合い高まっていく活動である。⁷とあり、「造形的な見方・考え方を働かせ」については、図4の下線1のように表記されている。図4下線2のように、創造性を育む際の知性と感性の一体化の重要性を理解した上で、図4下線3・4の様な造形的な視点を働かせることが、図4下線5の自分自身や自分にとっての意味や価値をつくりだすことにつながるということが示されている。

このことから、造形的見方・考え方を働かせた授業の実現は、深い学びへの手立てとして有効であると考えられると同時に、学校教育に求められている「新たな価値の創造」「目的の再構築化」にもつながる重要なものであると考えられる。また、美術による学び研究会(2023)⁸によると、2006年のリニューアル後から、MOMA(ニューヨーク近代美術館)は対話型鑑賞プログラムVTS(visual thinking strategy)に代わる探究的な鑑賞IBA(Inquiry-based appreciation)を実施しているとあり、作品について自由に話し合うのではなく、テーマに沿って思索し探究することを意味する。とある。VTSでは対話の進行は観客の発言に委ねられたが、IBAではテーマに沿って発言が方向づけられる。と続き、従来の対話型鑑賞から、型のない対話鑑賞を経て、視点を設けながらテーマに沿った探求的な鑑賞へと発展してきたことが伺えた。これらから、先述の通り図画工作科における鑑賞の重要性を再認識し、日常的に授業内に表現活動と一体として取り組む鑑賞や校内環境も含めたカリキュラム編成の実施、ギャラリートークの事例を基にした造形的・探求的な視点に主眼を置いた実践検証、の2点を重点的に行うこととした。

(3) 授業カリキュラム改善における先行研究の分析

先行研究の分析を通し、カリキュラム・マネジメントの重点である教科等横断的な視点、実施状況の評価・改善、人的・物的体制の確保、を確認した上で、現時点での在籍校における自分なりのカリキュラム編成を行うこと、特に実施状況の評価・改善に重点的に取り組み、その際自分自身の課題である「指導と評価の計画」の作成と、主体的に学習に取り組む態度の評価方法に留意する必要があるということが分かった。解説の第一章1(1)では、中央教育審議会答申において、“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現をめざし、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の6点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現をめざすことなどが求められた(図5)。また、学習指導要領第1章1(2) 各学校におけるカリキュラムマネジメントの推進では、「児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努める」ことについて新たに示した。とある。⁹ここから、カリキュラム・マネジメントの重点は、教科等横断的な視点、実施状況の評価・改善、人的・物的体制の確保であると捉えた。実施状況の評価・改善について、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料小学校図画工作(2020)¹⁰では、各教科の評価については、観点別学習状況の評価と、これらを総括的に捉える「評定」の両方について実

- ①「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
- ②「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥「実施するために何が必要か」(学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策)

図5



図6

(参考) 評価規準の設定(抄)
(文部省「小学校教育課程一般指導資料」(平成5年9月)より)
新しい指導要領(平成3年改訂)では、観点別学習状況の評価が体系的に行われるようにするために、「各観点ごとに学年ごとの評価規準を設定するなどの工夫を行うこと」と示されています。
これまでの指導要領においても、観点別学習状況の評価を適切に行うために、「観点の階層を学年別に具体化するなどについて工夫を加えることが望ましいこと」とされており、教育委員会や学校では目標の達成の程度を判断するための基準や尺度などの設定について研究が行われてきました。
しかし、それらは、必ずしも「知識・理解の階層を中心に中心に置かれており、また「目標を十分達成(4)」、「目標をおおむね達成(3)」及び「達成が十分(1)」ごとに評価にわたって設定され、結果としてそれを単に数値的に処理することには陥りがちであったとの指摘がありました。
今回の改訂においては、学習指導要領が目指す学力観に立つ教育の実現に役立つようにすることを改訂方針の一つとして掲げ、各教科の目標に照らしてその実現の状況を評価する観点別学習状況を各教科の学習の評価の基本に据えることとしました。したがって、評価の観点についても、学習指導要領に示す目標との関連を密にして設けられています。
このように、学習指導要領が目指す学力観に立つ教育と指導要領における評価とは一体のものであると考えられ、各教科の目標の実現の状況を「関心・態度・態度」、「思考・判断・表現」、「技能・表現(または技能)」及び「知識・理解」の観点ごとに適切に評価するため、「評価規準を設定する」ことを明確に示しているものです。
「評価規準」という用語については、先に述べたように、例として学習目標に立つ学習目標から自ら導き出した学習目標や評価規準(指標)と、また、学習指導要領の目標に基づき編成された教育や能力の育成の実現状況の評価を目的とする指標から用いたものを指します。

図7

1 題材の目標を作成する
2 題材の評価規準を作成する
3 「指導と評価の計画」を作成する
授業を行う
4 観点ごとに評価する

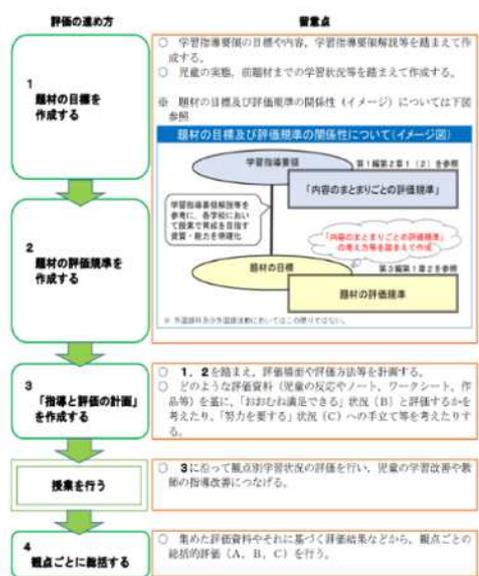


図8

施するものとされており、観点別学習状況の評価や評定には示しきれない児童生徒の一人一人のよい点や可能性、進歩の状況については、「個人内評価」として実施するものとされている(図6)。図7の下線1にある課題の解決策として、下線2のような評価規準の設定が提唱された経緯も念頭に置き、図9の様な手順で評価を行うことが必要である

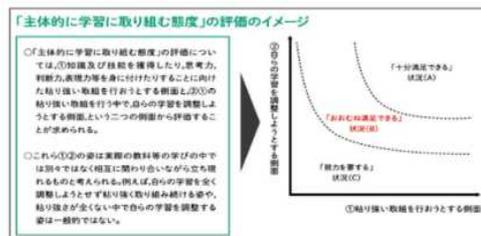


図9

ることが分かる。このことを踏まえて自身の実践を振り返ると、図8の3「指導と評価の計画」の作成と、主体的に学習に取り組む態度の評価方法に課題があることが分かった。図10にあるように、記録の方法と種類、場面の精選を取り入れた具体的な評価の計画の作成を意識的に行うことと、図6・9にあるように、個人内評価と評定の棲み分けを行い、かつ、粘り強く自らの学習を調整しようとする姿(自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さがまったくない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない)の見取りを意識的に行うことが必要である。また、千葉大学教育学部研究紀要(2020)¹¹においては、図11の様に三つの「資質・能力」を6つに分類しその組み合わせ(ユニット)によってカリキュラムデザイン考案をしている。その中で、三つの「資質・能力」、特に「学びに向かう力、人間性等」と「思考力、判断力、表現力等」の2つは、得ることができない、育てる「課題・目標」である。カリキュラムは行政や研究者が作成編成し教師に渡していくものではなく、学校や教師自身が編んでいくものである。そのためには、造形、美術教育の中でカリキュラムの扱いを概観しながら、授業デザインをもとに、どのようにカリキュラム編成を行うことができるかを試行することが重要になる。と述べている。これらを受け、冒頭でも述べた通り、カリキュラム・マネジメントの重点である、教科等横断的な視点、実施状況の評価・改善、人的・物的体制の確保、を念頭に置いた現時点での在籍校における自分なりのカリキュラム編成を行うことに意義を見いだした。特に 実施状況の評価・改善に重点的に取り組み、その際自身の課題である 記録の方法と種類、場面の精選を取り入れた具体的な評価の計画の作成を意識的に行うこと、個人内評価と評定の棲み分けと、粘り強く自らの学習を調整しようとする姿の見取りを意識的に行うことに留意することとした。

(4) 評価の計画を立てることの重要性
 学習指導のねらいが児童生徒の学習状況として実現されたかについて、評価規準に照らして鑑別し、毎時間の授業で適宜指導を行うことは、育成を目指す資質・能力を児童生徒に育むためには不可欠である。その上で、評価規準に照らして、観点別学習状況の評価をするための記録を取るようになる。そのためには、いつ、どのような方法で、児童生徒について観点別学習状況を評価するための記録を取るのかについて、評価の計画を立てることが引き継ぎ大変である。
 毎時節児童生徒全員について記録を取り、記録の資料とするために蓄積することは現実的ではない。よから、児童生徒全員の学習状況を記録に集め場面を精選し、かつ適宜に評価するための評価の計画が重要になる。

図10

2 調査研究

本研究では、以下の方法で調査研究を実施した。

(1)「主体的・対話的・深い学びにつなげるための振り返りの方法」について、今までの自身の 実践を振り返り、整理し、新たに得た振り返りに関する先行研究の知見を基に、新たな実践へとつなげる。



教育課題、3つの課題要素、6つの活動課題、領域のピラミッド構造

図11

「表現活動を通して自他を尊重し合う児童の育成～リフレクションと鑑賞を軸に～」

(2) 図画工作科における鑑賞について、ギャラリートークの事例を基にした造形的な視点に主眼を置いた実践の検証を行う。

(3) 主体的・対話的で深い学びにつながる振り返りと、日常的に授業内に表現活動と一体として取り組む鑑賞や校内環境も含めたカリキュラムを編成する。

3 授業研究

(1) B 日常的な鑑賞における具体的なアプローチ

本研究を行うにあたり、図3で示した通り「思考力、判断力、表現力等」の資質・能力を育むための手立ての一つとして、B 日常的な鑑賞では、校内研究・展覧会とも関連させたギャラリートークが有効であると考えた。実践を通して、さまざまな見方・考え方を広げ深められる児童、寛容でありながら自分の意見を表現できる児童の姿へつなげることができるかを検証した。

(2) 検証授業（令和5年11月実施）

第6学年「ギャラリートーク」の検証授業を実施した。

ア 実践の概要

本題材は、ギャラリートークの活動を通して、親しみのある作品などを鑑賞し、形や色などの造形的な特徴を基にイメージを深めたり、造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深めることをねらいとした題材である。図12のような題材計画で実施した。児童の実態として、寛容ではあるが自分の意見を表現しにくい児童が多く、第3時の校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。ギャラリートークの活動を通して、また、形や色などの造形的な要素を中心に、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて興味をもつことで、さまざまな見方・考え方を広げ深められる児童、寛容でありながら自分の意見を表現できる児童の姿へつなげていくものとした。

イ 考察

時	目標	学習内容・学習活動	評価基準		評価方法等
			知識	技能	
第1時	見聞した作品の印象を通して思いを感じたことや想像したことを共有する。思いを言葉に表現し、思いを伝え合う。	各クラスで大判のポスターを縦向きでグループワーク（5人組）で制作する。	アイ	イ①	活動の様子、観察、対話、ワークシート
第2・3時	各クラスで大判のポスターの活動を通して、形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもち、造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める。	各クラスで大判のポスターを縦向きでグループワーク（5人組）で制作する。	アイ	イ①	活動の様子、観察、対話、ワークシート
第4・5時	各クラスで大判のポスターの活動を通して、形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもち、造形的なよさや美しさ、表現の意図や特徴、表し方の変化などについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方や感じ方を深める。	各クラスで大判のポスターを縦向きでグループワーク（5人組）で制作する。	アイ	イ①	活動の様子、観察、対話、ワークシート
第6～8時	校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。	校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。	アイ	イ①	活動の様子、観察、対話、ワークシート
第9時	校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。	校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。	アイ	イ①	活動の様子、観察、対話、ワークシート
第10時	校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。	校内研究授業に向けての事前のアンケートでは、「全体での発言・発表が苦手である」という児童が多いという結果が出ており、他の教科等でも特定の5から6名の児童が発言を行い、それ以外の児童が聞き手に回りがちになる、という傾向があった。	アイ	イ①	活動の様子、観察、対話、ワークシート

* 詳細な手順は、題材を通して、第3時に記録する。

図12

本時は図 13 の様な流れで実施し、活動が進むにつれ、意欲的に見たり・感じたり・伝えたりする姿が見られた。展開 1 では「3」という作品(図 14)でギャラリートークを行い、児童からは、「カエル」「アルファベットの H」等見たてによるものや、「下の絵が見えず残念」「勢いがあっていい」、等、絵の具の重なりでの賛成・反対の意見、「これは何の時間だろう」といった文字の価値付け・推測等、さまざまな意見が出た。実際の作家との対面でのやり取りによって、見ることに意欲が次第に高まるようすが見られた(図 15)。意欲の高まりと同時に、展開 2 では、児童の主体性を基にした探究的な活動の姿を目にすることができた。ギャラリートークで話題に取り上げられた中から自分の興味に応じて実際に匂いをかいだり触れてみたり、計算を試してみたり他の絵をトークしてみたり、という具体的な姿を見ることができた。また、図 16 の 展覧会でのギャラリートークでは、事後の感想の中に、「展覧会 はじめての挑戦 達成感 うまくいったな ギャラリートーク」という言葉を残している児童や、「私は普段、自分から手を挙げて発言することはしない。理由は間違えるのが怖いし、間違えたら恥ずかしいから。でも、私を変える大きな出来事があった。それは、ギャラリートークだ。(中略)保護者の方たちが、たくさん意見を言ってくれて、自分でも気付かなかったところに気付いていたので、とても面白いギャラリートークになった。教室に戻ってきたときには達成感でいっぱいだった。まるで、1 回目の 1 組のグループとやったあとのギャラリートークをやった後の気持ちと真逆だなと思った。」「これからは勇気を振り絞って、発言してみようと思うきっかけにもなった」といった自己の変容を丁寧に述べる児童もいた。絵を通して見たことや感じたことを伝え合う面白さに気付いた児童もいれば、人に話しかける勇気、発言してもらえることの嬉しさに気付いた児童もいたと推察される。

時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点・配慮事項	評価規準 (評価方法)
導入 3分	<ul style="list-style-type: none"> 作品を展示した状態で入室する 本時の学習内容を確認する。 実際に現在活躍しているさっかの作品を鑑賞(ギャラリートーク)することを知らせる めあてを確認する 	<ul style="list-style-type: none"> 2 作品目は伏せておく 展覧会でのギャラリートーク活動を振り返らせる 椅子などない状態で、絵の見える範囲に集まり座らせる 	
展開 1 0分	<p>これまでの活動を思い出しながらギャラリートークを楽しもう ギャラリートークを通して自分の見方考え方を深めよう</p> <ul style="list-style-type: none"> 作品 1 のギャラリートークをする。 はじめに 30 秒間程度絵をじっくり見る時間を設ける ここには何が描かれていると思いますか 題名の発表 	<ul style="list-style-type: none"> 今まで 6 年生が取り組んできた基本的なギャラリートークを想起させる。 意見を繋いだり、新たな視点を与えたりしながら、ファシリテートする。 自由に話しやすい雰囲気をつくる 簡単な解説をする 	ア (活動の様子の観察、対話、授業動画)
展開 2 5分	<ul style="list-style-type: none"> 作品 2 のギャラリートークをする 3 分程度自由にギャラリートークを行う <p>作家本人がこの場に居ることを伝え、一緒にギャラリートークを行う</p> <ul style="list-style-type: none"> 作家と交えてギャラリートークや質疑応答を行う 作家から作品の解説や、その他の作品制作で大切にしていることなどを聞く 	<ul style="list-style-type: none"> 場所の移動と、作品 2 の提示 同じ作家の作品ということ伝える 質問なども含め自由に感じたことや思ったことなどを伝えるように促す。 作家の思いや考えはあるが、それが正解ではなく、作品をもとに見方や感じ方を深めることが大切であると感ぜさせる。 	ア (活動の様子の観察、対話、授業動画) イ (活動の様子の観察、動画、対話)
まとめ 7分	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートに本日の感想や作家へのメッセージを記入 2-3人が発表 活動の感想を話したりして、本時の活動に価値付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> 書ききれなかったワークシートは授業終了後教室で記入させ回収する。 2-3人が発表 活動の感想を話したりして、本時の活動に価値付けをする。 	ウ (活動の様子の観察、動画、対話、ワークシート)

図 13



図 14



図 15



図 16

(3) A 日常的な振り返りにおける具体的なアプローチと考察

本研究を行うにあたり、図3で示した通り、「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力を育むための手だての一つとして、A 日常的な振り返りでは、今までの自身の実践を振り返り、整理し、振り返りに関する先行研究の知見を基に、新たな実践へとつなげることが有効であると考えた。今までの実践をまとめ、見通し重視のシラバス型（図18）、過程重視のポートフォリオ型（図19）、事前事後の変容重視OPPA¹²型（図20）、学び合い重視のふせん型（図21）、主体性重視のフリーボード型（図22）の5つに分類した。なおの実践が本年度新規に取り組みを始めたものである。

またと並行して、一時期1人1台の学習用端末を活用したポートフォリオを第5・6学年のみに導入した期間があった。互いに作品や振り返りに対して相互鑑賞ができる点と、児童主体の視点による写真記録を期待して導入したが、端末に不慣れ、記録データの譲渡の困難さ、Wi-Fi環境・破損や汚れ対策等、すぐには解決しにくい問題が発生したため、一時中断という形となった。ICTの活用については可能性を感じており、今後もできることから取り入れていきたい。今までの学習を活かしつつ、容易に共有できる手段としてアナログの付箋での振り返りの共有を高学年中心に実施した。授業後の振り返りの交流につなげ、新たな気付きが生まれる場として活用を検討する。

は指導教授から過去の自由記述式のワークシート実践や助言を受け、より児童の主体性に基づいた振り返りのスタイルはないものかと考え、第6学年対象にフリーボード形式の振り返りシートを作成した。今までの積み重ねもあり、いきなりフリースタイルを提示されると困惑する児童の姿が予想されたため、今回は、日本能率協会コンサルティング JMAC の提唱する Y・やったこと、W・わかったこと、T・次やりたいこと、の振り返りの視点を取り入れて実践した。第3学年から4年間担当した子どもたちを対象にした初めての取組であったため、今までの振り返りの経験に良くも悪くも左右されるということ強く感じる実践となった。長期的・

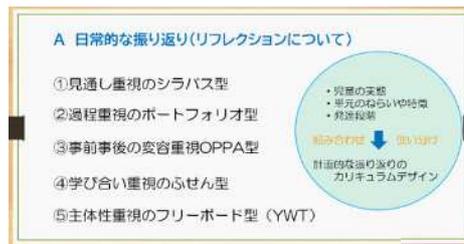


図 17



図 18



図 19



図 20

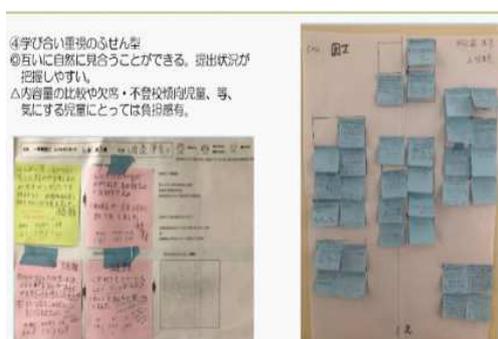


図 21



図 22

計画的に、少しずつ進めていけば、より児童主体の振り返りの実現可能性が高くなるのではないかと感じた。これらの振り返りを、児童の実態（これまでの振り返りの積み重ねも含む）単元のねらいや特徴、発達段階に応じて組み合わせたり使い分けたりすること、計画的な振り返りのカリキュラムデザインを取り入れることで、より効果的な振り返りが実現できるのではないかと考えている。

第4 研究の成果

本研究の成果として、以下の2点を挙げることができる。

A 日常的な振り返りについては、今までの実践を自分なりに価値付けることができ、児童の実態や発達段階の違い、単元のねらいに応じた効果的な振り返りの使い分けについて、今までより理解を深めることができた。粘り強く肯定的な振り返りの指導を4年間積み重ねれば、児童主体の振り返り（省察）へとつながる可能性があると感じた。

B 日常的な鑑賞については、展覧会・校内研と絡めたギャラリートークを実施し、児童の変容を見取ることや、意欲の高まりを感じることができた。担任や、外部団体の力を借りたことで、図画工作科の時間だけでは難しい丁寧な指導・質の高い新鮮な学びの機会を提供することができ、児童の主体的・対話的・深い学びの一端を垣間見ることができたと感じる。

第5 今後の課題

時間の制約がある中で、児童へ効果的な振り返りをさせるには、教師の振り返りマネジメント力の向上が必須であると感じた。今後無理のないカリキュラムデザイン、子どもの振り返り能力の確実な向上について検討し、余裕をもった振り返り・鑑賞も含めたカリキュラムデザイン編成に向けて題材の時間設定や時期の見直しを行う。題材ごとの鑑賞の方法については、引き続き工夫・改善する。常設展示やギャラリートークに関しては、計画的な運営の難しさを実感し、外部・他教科連携に費やす時間の確保が課題であると感じた。カリキュラム・マネジメントの重点教科等横断的な視点、実施状況の評価・改善、人的・物的体制の確保の実現ができるよう工夫改善していく。

第6 引用文献

- 1 文部科学省：「小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 図画工作編」,2018
- 2 桜井茂男：Bulletin of Tsuba Developmental Clinical Psychology, Vol12 2000 [原著]
ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討
- 3 浜野隆：『非認知能力×認知能力 子どもの才能を伸ばす 最高の子育て』,2023
- 4 前掲1
- 5 文部科学省国立教育政策研究所「『主体的・対話的・深い学びを実現する授業改善の視点につ

「表現活動を通して自他を尊重し合う児童の育成～リフレクションと鑑賞を軸に～」

いて』, 2020

- 6 梶浦真著・小林和雄監修：『主体的・対話的で深い学びを実現する【振り返り指導】の基礎知識』, 教育報道出版社, 2020
- 7 前掲 1
- 8 美術による学び研究会：「対話型鑑賞 75 年を超えて」当日配布冊子
- 9 前掲 1
- 10 文部科学省国立教育政策研究所 『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校図画工作』, 2020
- 11 千葉大学教育学部研究紀要 第 68 巻 99～109 頁：造形, 美術 (図画工作・美術科) 教育における 資質・能力 (教育課題・目標) を基盤にした 授業デザインとカリキュラム編成・「教育課題・目標」と「表現・鑑賞内容」の二視点から ユニット (単元) を構成する編成方法の試案・佐々木 達行 1)・鈴木 大啓 2)・江藤 知香 3)・小橋 暁子 4) 1) 八洲学園大学 2) 千葉大学教育学部附属小学校 3) 千葉大学教育学部附属中学校 4) 千葉大学・教育学部, 2020
- 12 堀哲夫：『新訂一枚ポートフォリオ評価』, 2019

【研究成果発表会でいただいた質問とその回答】

- 振り返りでの5つの型を組み合わせ、使い分けをするということでしたが、こういった組み合わせや使い方をしたのか。
- どんなねらいで、どのタイミングでどれを用いたのかが知りたい。

シラバスタイプ・ポートフォリオタイプ・OPPAタイプは通年実施経験しかないが、今現在、来年度は第3・4学年においてポートフォリオタイプとOPPAタイプを混ぜながら、実施予定です。第5・6学年については、ようすを見ながら付箋タイプとOPPAタイプを取り入れ、徐々にフリーボードタイプの制約の幅を広げていくイメージで実施予定である。全員で素材の固定がある場合などは、文字情報のみでも互いの実施内容がシェアしやすいが、素材や技法が自分で選択できるタイプの題材には画像等が必要である。短時間でイメージが共有しやすい振り返りができないかと学習用端末導入も含め思案中である。共同のプロジェクトなども絡められれば、フリーボードの使い方は、互いの意見や振り返りの視点が共有でき、互いの見方・考え方が深められると考えています。

- 日常的な振り返りとして、5種類の提案がありましたが、これらは単元毎に5種類を用意して児童が選択をするのでしょうか？教員の方で選択するようでしたら、選択された基準等再度詳細を教えていただけたらと思います。

児童選択タイプも興味があるが、保管や管理面からまだ実用は難しいと感じています。上記のように、中学年で振り返りの習慣を付けるためにも、中学年では年間での型は固定で行う予定です。第5・6学年では、学期もしくは年間シラバスを事前配布し、スケッチブックもしくはクリアファイルなど自身で保管するスタイルを選択することなどは可能だと考えています。

- 低学年を担当したときに振り返りの時間を十分にとっていなかったなと思いました。質問は制作活動の時間と振り返りの時間のバランスはどのようにすればよいのでしょうか。

内容により5分程度前後しますが、片付け・掃除・振り返りを含め15分間で実施することが多いです。